

文楽座九月興行〈摘録〉

〈出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」第九十八号、明治44年9月〉

久敷夏休して居る同座は、去二十日より木戸を開た。前狂言に、双蝶々曲輪日記、大序より橋本迄、切に、本朝二十四孝、下駄場より十種香までを据え勝太郎が喜右衛門の前名勝市と改名して景気を添え、花々敷開場し、初日に南地義太夫芸妓の惣見あり。大掾の橋本が珍しいので上景気と聞ては立ても居てもたまらず、第三日目に覗いて見たら、其日は客足を道頓堀に吹取られたか四分の入りで有て、時の新町揚屋の段切で長五郎と長吉立引の処へ入場したからお笑草に吾感じを並べて御目に掛くべし。

●景勝上使の段 竹本源太夫 糸野澤勝市

是は景勝上使より鉄砲渡し迄語る。立声なれば無難。

●十種香の段 竹本南部太夫 糸豊澤猿糸

ツレ弾が、春治郎、大糸、一弥、の三人毎日替りて、琴は、豊澤猿三。此場の道具は、目を剝た程大張込で得心せり。太夫は今回は余程師匠に叩いて貰うたと見え出来が能い。声も能く出た。大向うは時々拍手して喜んだ。是なれば南部の価値はある。しゅしゅ云うのは此人の癖なれば致し方なし。少し申し分なきにしもあらざれど、声の能いのは七難隠すと致し置く。猿糸は最早弾く時代に近しと見え、耳立ず品位能く弾た。栄三の八重垣姫は段々能く成り、狐も初代（玉造）の型丈けでも遣うのは結構。併し初代のを充分見た目にはまだ修行の余地有るを感ず。松の木の上より石燈籠を抜けての早替りは新工夫にして宜しかった。

六月の文楽座〈摘録〉

〈出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」第二百九十二号、昭和5年6月〉

前狂言本朝二十四孝桔梗ヶ原より狐火まで。偕此の外題は元亀天正の勇将武田信玄、上杉謙信等の名を借り仕組みたるものにて大体の趣向は美濃の斎藤道三が家の仇たる義晴をだまし討にし謙信、信玄、義晴、氏時等を亡ぼし天下を掌握せんとする謀叛に起る。其の謀叛人を見出さん為に上杉と武田は態と敵となり戦争をする。それを知らぬ義晴の後室は両家和睦の為に勝頼と八重垣姫とを云号させる。これが大序にて大詰は道三を初め義晴、氏時も亡び上杉、武田は合体して勝頼、八重垣姫首尾よく結婚して目出たし目出たしである。作者は近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛外三名の合作で明和三年正月十四日竹本座に上場せしもの。

▲十種香の段 竹本土佐太夫

三味線 野澤 吉兵衛

先月以来非常に声を痛めて居たので綴が代り役を務めて居たるに十二日より土佐太夫が出勤と聞き綴に対しては残念であり土佐に対しては幸いであった。偕この十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを述べ、上杉武田両家和睦の為とて義晴の後室手弱女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁させ。大切には道三が滅亡し勝頼八重垣姫

は芽出度夫婦になるのであるが十種香の場の勝頼は実の勝頼で先に切腹したのは花造りの
 簀作。仍ち其処に取替子の面白さが湧いて来る。濡衣は簀作と通じていたが濡衣は齋藤道
 三の娘。道三は菊造りの関兵衛で勝頼も亦花造りとなつて共に上杉へ忍び入っていたも
 の。狐火の氷渡りの事は支那西湖の故事であるのを諏訪湖へ持て来たものである。

「行水の」から、帳台まで堀江座以来文楽と抗争した程の専売ものなれども老来すこぶ頗る声を
 傷めて居る。然るに此の老師を煩わさねばならぬ程斯界に声を以て鳴るものが居ないのは
 悲しむべき事である。鑊は聞かないから評は出来ないが如何に声を損じて居ても其の貫禄
 と味は争われぬものありて当代随一の十種香と評して憚らない。

▲狐火の段 竹本南部太夫
 三味線 野澤 吉弥
 ツレ 野澤 友平
 鶴澤綱右衛門
 鶴澤 清二郎
 琴 野澤 勝三郎
 竹澤 団二郎

「思ひにや」より三重まで、高い調子で声映りに根底がない。南部として悪い所はない。
 吉弥の糸も立派なものなれど、突然高い処より出るから芸のつぎ合せが出来ない。矢張り
 三段目と同じ結果を見た。世間の人は南部がキイキイ云うばかりと評すけれども南部吉弥
 の苦しい不利な立場を洞察してやらねば殺生である。土佐と南部は其の幅員に於て延長に
 於て重量に於て当然懸隔はあるが、土佐が帳台でぎんみを引きたりとて手柄顔は出来な
 い。紋下の責任がある。矢張り狐火を演り了つてこそ始めて四段目の完成である。南部は
 土佐の語り残した糟粕そうはくを捉え僅に「翹つばきがほしい羽がほしい飛んで行きたい知らせたい、逢
 みたい見たいと夫恋ひの千々に乱るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし」を巧妙に語りたれ
 ばとて南部太夫の全部の価値とはならない。矢張り太夫も三味線も損である。寧ろ替り役
 を南部に命じて一段ぶっ通しにやられた方が鑊を以て替らしむるより芸のきまりがつくと
 思う。負荷堪え難しと云う向もあろうが演らして見ねばわからぬ。若手の登龍門は替り役
 にある。南部たるもの大に努力すべし。因ちなみにツレは友平、琴は団二郎の出番であつた。人
 形の早替りは致方なきも其他の出遣は見つともない。役割左の如し。

娘八重垣 吉田文五郎
 腰元濡衣 桐竹 政亀
 長尾謙信 桐竹 門造
 白須賀六郎 吉田 市松
 花造り簀作
 実は武田勝頼 吉田扇太郎
 原小文治 吉田 文作